

---

Memories ~バカカップルどもの春夏秋冬~

聖闘士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Memories ～バカップルどもの春夏秋冬～

### 【Nコード】

N2538L

### 【作者名】

聖闘士

### 【あらすじ】

これは、バカップルどもが織りなす一年間の物語  
これを読めば、日本人の正しい行事の過ごし方が分かるはず？

\*この連載は、基本的に一カ月に一回の更新です。

睦月　　く梨とコタツとバカップルく

とあるアパートの一室、向かい合ってコタツに入った二人の男女が口論をしていた。

「なんで、あたしがお茶くみに行かなきゃならないのよっ！あんたが行けばいいでしょっ！」

「正月早々、いきなり俺の家に押し掛けて来るなり、コタツに入っ  
て『寒いから、温かいお茶が飲みたい』って言ったのはお前だろう  
がっ！しかも、俺にはお茶っぱがどこにあるのか分かんねえんだよ  
っ！」

「ここはあんたんちなんだから、自分の家にあるものぐらいちゃん  
と確認しておきなさいよっ！」

「お前がこないだ雑にしまったせいで、分かんなくなっただらう  
がっ！」

「あたしのしまった場所ぐらい分かりなさいよっ！」

「無茶言っなっ！そんなもの分かるわけないだろっ！」

「そこは愛の力でっ！！！」

「……無理だっ！！！」

その後も、ケンカなのかじゃあいなのか分からない言い合いは続いたが、結局、男の方が台所へお茶を煎れに行くことになった。

「……理不尽だ」

「さすがっ 愛してるわよっ 私の愛しの彼氏様っ」

「……おかしいな……？ちっとも嬉しさがわいてこないぞ」

「あ、ついでにお茶請けもよろしく」

「……」

男は、何を言っても無駄だと感じたのか、無言のまま女の方を一瞥<sup>いちべつ</sup>すると、これ見よがしにため息をつきながら、台所へと姿を消した。

30分後、湯のみに入ったお茶二つと、キッチンと皮がむかれた梨が一皿、コタツに運ばれてきた。

「何で梨なのよっ！コタツと言ったらミカンでしょうっ！」

男は口元を引きつらせつつ、こつ答えた。

「文句があるんなら、自分で買ってこいっ！俺はミカンよりも梨の方が好きなんだよっ！……！」

「あら！この梨意外とおいしいわね」

「……結局、食うのかよ……」

男は文句をたれ流しつつも、自分は梨にはほとんど手を着けずお茶も一杯しか飲まずに、女が梨を食べるのを黙って見守っていた。

そして皿に入っていた梨が全て無くなり、急須も空になると、女は

少しずつソワソワし始めた。

男はその事に気づくと、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「……?……ツツツ!!」

男の表情に女は一瞬いぶかしげな表情を浮かべたが、次の瞬間悔しそうな表情に変わると、男を睨みつけた。

「……あんたまさか……」

「ああ、お前の想像通りだろうさ」

男は勝ち誇った笑みを浮かべて、女に話し始めた。

「お前も知っているとおおり、梨は水分を多く含んでいる果物だ。しかも俺が一杯飲む間に、お前は何杯もお茶をおかわりした。つまり……」

お前は今、トイレに行きたくて仕方がないはずだ」

女は唇をギュッと噛みしめて屈辱に耐えているが、その眼だけは、今もなお男に向かって闘志をたぎらせていた。

そんな女の様子を目にした男は、さらに得意気になって続ける。

「当然トイレにたつ場合は、ここにある二人分の湯のみと皿を流しで洗ってもらおう。」

ああそうだ、ついでにポストから年賀状も取ってきて貰おうか。」

「!ツ・・・何ですって・・・」

女は愕然がくぜんとした面持ちでつぶやいた。

「おいおい、このぐらいのペナルティは当然じゃないか  
コタ  
ツから出るというのは、そういう事だろう?」

「・・・ええ、その通りね・・・」

次の瞬間、女はキッと男を睨みつけると

「でも、ムザムザやられるつもりはないわっ！……！」

そう言っつて、コタツを自分の方へ思い切り引っ張った。

『これであいつをコタツから出してしまえば私の勝ちっ』

女は逆転勝利を確信した。

しかし敵もさるもの、男の方もコタツを両手でしっかりと押さえて、コタツが動かないようにしていた。

「くっ……離しなさいよっ……！」

「そうはいかないっ！俺だって負けるわけにはいかないんだっ！……！」

「こっは、我慢比べといこっじゃないか」

「……！……！……！……！……！……！……！……！」



その後7分43秒に渡って続けられた死闘は、結局男の勝利で幕を閉じた。

我慢出来ずにトイレへと向かう女の後ろ姿を眺めながら、男は二週間ぶりの勝利の味に浸っていた。

そこへ

「そうそう・・・私のトイレ長くなりそうだから、洗い物をお願いねっ ついでに年賀状もよろしくっ」

「・・・なにいつ！」

現実には、時として非情である。

「まったく・・・正月早々、ムダな体力を使っちゃったわ」

「・・・ならば、正月早々やるせなくなった俺の気持ちは、どうしてくれる」

「そんなの、あんたが負けるから悪いんでしょ？」

「俺は負けた訳じゃないっ！」

「はいはい　試合に勝って、勝負に負けたって事でしょう・・・  
みつともない」

「聞こえているぞっ！・・・しかし、今年一年もこんな調子だとすると、俺の身が持たん・・・」

「しょうがないわねえ。ほらほら、せっかく私が梨を剥いてきてあげたんだから、食べなさいよ。はい、あ〜ん」

そう言われた男は素直に口を開け、女に食べさせてもらった梨をじつくり味わって食べ終えた。

「　やはり、この梨は格別だな。」

「あたしが剥いた梨だものねっ」

「・・・今回はそういうこととしておいてやるっ」

「なんか引つかかる言い方よね、素直に認めなさ・・・そう言えば、新年なのに、下らない掛け合いで大切なコトをすっかり忘れてたわ」

「原因はほとんどお前だろうがっ！」

「いちいち細かい男よね、あんたも。今は叫ぶより先に、やることがあるでしょうっ？」

「・・・非常に不本意だが同意しよう、続きはこれが終わった後だ」

「じゃあいくわよ、せーの」

「あけましておめでとーいげーいませす。今年も一年、よろしくお願  
いします」

如月　　くチョコとゲームとバカップルく

ここはとあるアパートの一室のドアの前。一人の男が、ドアを開けるために鍵を差し込んだ。

「　　ただいま」

男が返事を全く期待しないで言った言葉に

「おつかえりく　待ちくたびれちゃったわよっ！」

女性の声で返事が返ってきた。

男が慌ててリビングへと目をやると、そこには男の彼女がコタツでくつろいでいるという気の抜ける光景が広がっていた。女の両手両足ともコタツの中に入れており、まさしく『ぬくぬく』という擬音がピッタリの状況である。

「くくくく！どうしてお前がうちに居るっ？」

「あら・・・もしかして、今日が何の日だが覚えてないの？」

「・・・そうか、今日はバレンタインか」

「そうよっ　せっかくあたしがチョコを作ってきたんだから、もつと嬉しそうな顔をしなさいっ！」

「・・・あれを見た後で、か？」

男が指差した先では　女がチョコレートを作るために使用したのであるう　キッチンが凄い事になっていた。当然、このキッチンの掃除が誰の役割なのかは、長い付き合いなので男にはもう分かっている。

「掃除くらい良いじゃない。なんてったって、あたしの手作りチョコレートなのよっ　感動のあまり涙を流して感謝するのが筋つてものだわっ！！！！」

「するかっ、そんなことっ！」

「ん~~~~それじゃあ、感謝の踊りを踊ってくれるだけでいいわ」

「お前は・・・そんなに追い出されたいのかっ！」

「こんな寒い中、あたしに外で一晩過ごせって言つものっ？ご近所のみなさん、ここに人でなしが居ますよ~~~~」

「ええいつ、いちいち大げさなりアクションをとるんじゃないっ！」

いつも通りのケンカなのかじゃあいなのか分からない言い合いはしばらく続いた。

「ハア・・・それで、肝心のチョコレートはどこにあるんだ?」

男のその言葉を聞いた瞬間、女の顔がいたずらっぽいなものへと変わった。

「ふっふっふ・・・あたしの手作りチョコレートが食べたかったら、ゲームをクリアすることね!!!」

「ゲーム?」

「そう、ゲーム。」

ルールは簡単よ。あたしがこの家の中に隠したチョコレートを、あなたが見つければいいだけ」

「ルールはそれだけか?」

「ええ、それだけよ。もちろん、あたしへの愛の力で一発で見つけてくれるわよね?」

「・・・フン、お前の考えそんな隠し場所くらいすぐに思いつく。お望み通り、一発で見つけてやるさ」

男はそう言うと、チョコレートの隠し場所について考え始めた。

『 やはり一番可能性が高いのは、アイツ自身がまだ持っているパターンだが・・・アイツの居る部屋はストーブがガンガンに焚かれているし、ホットカーペットもつけてある。おまけにコタツ。チョコレートを隠すには、溶ける危険性が高すぎる

その点を考えると、冷蔵庫の中が有力に思えてくるが・・・  
あまりに単純過ぎて逆に怪しい

俺の寝室・・・いや、アイツは案外そういったプライベート  
な空間には立ち入らないから、俺の許可なしで入ることは考えづらい

風呂場・・・いや、このアパートの風呂場はトイレと一体に  
なっているから、衛生的に考えて、その線は薄い

意外と、キッチンという線も有力だな・・・木を隠すには森  
の中と言っし、あれだけ散らかっていれば探されないと踏んだのか  
も知れん。だが、ここは・・・」

そうして、決意を固めた男が向かった先は

先ほど入ってきた玄関であった。

玄関にたどり着いた男は、郵便受けの中を覗き込んだ。そしてその  
中にあるものを確認すると、不敵な笑みを浮かべながら女の方へ向  
き直った。女がつまりらなそうな表情をしているのを見て取ると、男  
は勝ち誇った様子で説明を始めた。

「お前にしては、なかなかよく考えたと褒めてやろう。俺が玄関を  
開けた瞬間に声をかけてきたのも、俺の注意を郵便受けからそらす  
ための精一杯の小細工だったのだろうが　俺の目は誤魔化せな

い  
「

そう言うと男は、おもむろに郵便受けの中に手を入れ、すぐにその手を引き抜いた。そしてその手には、包装紙で乱暴に包まれた薄い箱が握られていた。

男は仏頂面をしている女の顔を勝ち誇った様子で眺めながら、包装紙を丁寧にはがし、中に入っていた箱の中身を確認してみると、そこには

『ハズレ』

と、大きく書かれた紙が入っていた。

それを見た男が口を開けたまま動けずにいると、今まで仏頂面をしていた女の方が、

「ぶっ、あははははははっつっ

なぐにが『俺の目は誤魔化せない』よっ！完璧に外してるじゃな  
いっ！！！！」

と、コタツに入ったまま大声をあげて笑いだした。

「……馬鹿な……こんなはずは……」



「ふっふっん 慈悲深いあたしは、もう一度だけチャンスをあげるわよっ！今度こそ見つけてみなさいっ」

「ぐっ、偉そうに・・・大体お前はいつも」

そこまで言った男は何か気づいたように女の方を注意深く見ると、そのまま何かを考えだした。そしてしばらくの間そこを動かかなかったが、やがて何かに納得したのか、女がコタツで待つリビングへと歩き出した。

男は女の座る横まで来ると、ゆっくりと話した。

「・・・俺は勘違いをしていた。『チョコレート』と聞いて、反射的に板チョコのような固形のチョコレートを連想してしまっていた

」

そう言って、いまだにコタツに入ったままの女の右手の方にある布団をまくりあげた。そこには

新品のマグカップの中で湯気をたてる、甘い匂いのする茶色の液体  
いわゆる『ホットチョコ』と呼ばれるものが隠されていた。

マグカップにはきちんとラップがかけられており、埃などが入らないようになっている。

「当たたり〜でも、良く分かったわね？あたしは次にキッチンの方を探すかと思ってたわ」

「確かにそのつもりだったさ。だが、お前の様子を見て俺の最初の考えが正しいことを悟ったんだ。」

お前が俺を笑い者にするときは、もっとコタツを揺らすぐらい大笑いをしているはずだからな。

大方、ホットチョコがこぼれないように気を使っていたんだろう？

「失敗したわね・・・でも、一発で当ててくれなかったってことは、あたしに対する愛が足りないってことかしら？」

「・・・俺がホットチョコを考えに入れていなかったのには、深い理由があつてだな」

「あら、負け犬の遠吠え？」

「断じて違うっ！お前、俺が猫舌だということを忘れているだろうっ！！！！」

その言葉を聞いた女はにつこりとした笑顔を浮かべると

「あ〜ら、それについてはちゃんと計算に入れてあるわよ」

と言って、どこからかスプーン　これも新品である　を取  
り出した。そしてそれを使ってマグカップからホットチョコを一杯  
すくい出すと、それを自分の口の前までもっていき「ふ〜ふ〜」と

息を吹きかけて冷まし始めた。

女は十分に冷めたと判断したホットチョコを

「はい、あ〜ん」

と言って、男の前へと差し出した。

男は恥ずかしさのあまり反射的に拒絶しそうになったが、自分が敗者であることを思い出すと素直に口を開き、ホットチョコをじっくり味わって食べ終えた。

「味の方はどうかしら？」

「・・・美味しい・・・」

「さすがはあたしの手作りねっ」

「・・・今回もそういうことになっておいてやる」

「まったく、素直じゃないんだから」

あ、当然ホワイトデーは三倍返しねっ それとプレゼントの仕方もあたしがやったみたいに一工夫ひとくふうしなくちゃダメよ？」

「・・・善処しよう」

「よろしいっ」

本日はバレンタイン、恋人たちが甘い思い出に浸る一日である

弥生 　　く箱とチヨイスとバカップルく

とあるアパートの一室の前、一人の女が玄関のドアの前で腕を組んで待っている。女の顔は正に、ワクワクという擬音がピッタリなくらい期待に満ちあふれている。女は待ちきれなくなったのか、部屋の中に向けて、大声で呼びかけた。

「もういいかい？」

その声に対して、部屋の中からは不機嫌な声が返ってきた。

「まだだと言っているだろうがっ！」

「……大体約束は八時からのはずなのに、何でお前は六時前に来るっ！」

「フッフッフ、あんなものであたしを止められると思ったら大間違えいよっ！」

「意味が分からんっ！」

「……まあ、お前の事だから、俺からのお返しが楽しみで待ちきれなかった、という所なんだろうがな」

「あらっ さっすがあたしの彼氏様っ、あたしの事なら何でもお見通しねっ」

という訳で、入らせてもらっわよ?」

「何が『という訳』なのか、意味が分からんのだが?」

「そういう所を愛の力で理解するのが、彼氏の務めでしょっ!」

「無理だっ!!!」

・・・まあ、もう準備は出来たから、入ってきてても良いぞ」

「やった〜 おっじゃまします」

女は部屋の中へ入ると、まっすぐにリビングへと向かった。そしていつものコタツの上に、シートで覆われた『何か』が置かれているのを見ると、少し感心した様子でコタツに入っている男の方へ向き直った。

「あら・・・約束の時間よりも随分と早く来たはずなのに、プレゼントの準備はしっかりと出来ているじゃない?」

「当然だろう? お前が約束の時間よりも早く来ることぐらいお見通しだ。」

まあ、予想よりもお前が来る時間が早かったがな」

女は男が少々誇らしげな表情なのに気づくと、期待に満ちた表情でコタツの上の『何か』を見つめた。

「じゃあ早速っ 開けるわよ〜」

「まあ、待て お前にはゲームをしてもらおう約束だ」

男はそう言うと、『何か』の上に覆いかぶさっていたシートを取り除いた。

そこには、綺麗にラッピングされた大小二つの箱が並んでいた

「ルールはいたって単純だ。

お前には、ここにある大きな箱と小さな箱、どちらか一方を選んでもらう。お前が選んだ方が今年のホワイトデーのお返しというわけだ。

そして、選ばれなかった方のプレゼントは『処分』することになる。せいぜい、慎重に選ぶんだな」

男のルール説明を聞いた女は、少し渋い表情になると

「う〜ん・・・ちよつとありきたりね」

もっと別のサプライズは思いつかなかったの？例えばあんたが頭か

らチヨコ被って

『今年のプレゼントは俺だっ!!!!!!』

ってやるのとか・・・」

という、無茶苦茶な提案を行った。

「そんな恥ずかしい事が出来るかっっっ!

・・・大体、現実にそんな事されたら相手だって困るだろうが」

「あら・・・じゃあ、あたしが同じことしたら、あんたは拒否するわけ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・拒否する」

「あら?今、答えるまでにもものすごく間があった気がするんだけど、気のせいかしら?」

「うるさいっっっ!!!!!!さっさとどっちか選ばないと、どっちも没収するぞっ!」

「まったく・・・気持ちに余裕が無いのって、ヤ〜ね〜」

「誰のせいだっ!」

そんないつものじゃれ合いを一通り楽しんだ後、女はやや真剣な顔つきで二つの箱へと向き合った。



男には知る由もないことだが、女はこの日をとても楽しみにしていたため、昨日の夜はろくに眠れていなかったりする

女の目の前には、向かって左側に犬小屋程の大きさの大きな箱、右側にミカン程度の大きさの小さな箱が並んでいる。両方ともキツチリと手作り風のラッピングがしてあり、中身が分からないようになっている。

どちらの箱を選択するべきか・・・女は思案を巡らせ始めた。

『大きい箱の方に入っているのは、大きさから考えて大きめのぬいぐるみといったところかしらね？

でも、こいつがぬいぐるみを買に行くところを想像すると、何となくシユールよね

小さいほうの箱は、やっぱりアクセサリー関係？そういえば最近、自分の食事代なんかをケチってたみたいだし・・・ハッ

まさか、指輪っ！！！

なぐんで、こいつにそんな甲斐性がある訳ないか、期待するの  
もいちいちバカらしいし

『でも……一応念のため、小さい方の箱にしておこうかし  
ら』

「……一人で身悶えたりして、気持ち悪い奴だな……」

「うるさいわねっ！女の子にはいろんな事情があるもんなのっっっ  
！……」

「そうかい……」

それで、どちらの箱を選ぶか決めたのか？

「ええ、決めたわ。あたしが選ぶのは、

小さい方の箱よ！」

女が声高らかに宣言した瞬間、男が意地の悪い表情を浮かべる。

「ほう……そちらで良いのか？後悔するかもしれないぞ？」

「その手にはのらないわよっ！あたしが選んだのは小さい箱っ！これは絶対に覆らないわっ！！！」

「……ならば、何も言っまい。」

さあ、小さい箱を開けてみるが良い」

女は緊張した面持ちで小さい箱の前に座ると、周りを覆っている包装紙を丁寧にはがし始めた。女が包装紙をはがし終わり、ゆっくりと箱のふたを開けると、その中には

シミ一つない真っ白な色彩

それでいて控えめな光沢を放つ

真珠のイヤリングがそこには入っていた

女は中身が指輪ではない事に気づいて一瞬だけ残念そうな表情

を浮かべたが、中身がイヤリングだと分かると、蓮の花が咲くような微笑みを男の方へと向けた。

「あたしが一度だけ欲しいって言ったイヤリング・・・覚えててくれたんだ？」

「当然だろう？俺はお前の彼氏なんだ」

「フフツ、そうだったわね」

しばらくの間、アパートの一室には、暖房のものではない、温かな空気が広がっていた

「ところで、大きい箱の方に入っているプレゼントはホントに処分しちゃうわけ？もったいないと思うんだけどな」

「お前は本当に欲張りな女だな・・・だが安心しろ、大きい箱の中身は」

言いながら男は大きい箱の包装紙を綺麗にはがし、箱のふたを持ち上げた。

「この通り、俺特製のケーキになっている。後は、俺とお前の二人でこのケーキを『処分』すればそれで良いわけだ」

「・・・あたしが大きい箱の方を選んでたら、どうするつもりだったのよ？」

「お前が小さい方の箱を選ぶことは分かっていた。」

お前、小さい箱の中身は指輪なんじゃないかって期待したんじゃないのか？」

「・・・ノーコメントで」

今回は形成が不利なのを悟って女が言葉を濁すのを、男はニヤニヤしながら眺めていた。その表情に浮かぶのは、久しぶりに女をやりこめた充実感である。

女がそのニヤケ面に対して何か仕返し出来ないものかと思案していると、一つ気がついたことがあった。そして、女はそれをストレ

トに男へとぶつけることにした。

「ところであなた・・・もしかして、この巨大なケーキをあたしとあなたの二人だけで食べきるつもり？」

「つつつ!!!」

・・・スマン・・・ケーキを作るのに夢中で、そこまで気が回っていなかった・・・」

心底悔しそうに言う男の表情に、すっかり満足した女は

「ふっふっん 今日のアたしは機嫌がものすごく良いから、ケーキの一つや二つ、かるく食べきってやるわつつつ!!」

でもその前に、あなたにはやるべき仕事があるわよね？」

そう言って、自分の目の前にあるイヤリングを指差した。それを見た男は、即座に全てを理解して、イヤリングを手にとると、恭しくその片方を女に向けて差し出した。

「 それではイヤリングをお付けいたしますので、右耳をどうぞ、お嬢様」

「 つむ、よきにはからえ」

本日はホワイトデー。お返しと一緒に、普段は言えない胸の内を相手に伝える日でもある

## 卯月　　く嘘とクイズとバカップルく

とあるアパートの一室。今夜、再び熱いバトルが開催されようとしていた。

「では問題です　今日は何の日でしょうか？」

「今日は四月一日、エイプリルフルだが・・・また何か厄介な事を考えついたのか？」

「まあっ！厄介な事って何よ、厄介な事って！」

「そのまんまの意味だが？お前は毎回毎回、何かしら厄介な事を思いつくだろうが」

「・・・あなたの言う厄介事に、毎回ノリノリで参加してるのは誰だったかしらね？」

「つつっ！！断じてノリノリなどではないっ！！」

「つつそだくくく」

その後もしばらく、犬も食わないような言い合いが続く。

「　　ハア・・・いい加減疲れたから、お前の下らん思いつきとやらを話してみる」



「あら、素直じゃないわね。知りたいなら知りたいと、はっきり言えば良いじゃない？」

「……もうそれで良いから、さっさと話を進めてくれ」

「じゃあ行くわよ、一回しか説明しないから静かに聞きなさい！」

「……うるさかったのはお前だろうが」

「そこっ！うるさいわよっ！」

「理不尽だ……」

「ルールは簡単よ　今から一時間の間に、あたしとあなたの二人が交互に何かを言っていて、相手の言った内容にウソが交じっていると思ったら『ダウト』と宣言するだけ。ウソが交じっているのに気がつかなかったり、ホントのことを言っていたのに『ダウト』と宣言してしまった場合は　」

女はそこまでで言葉をきくと、自分のカバンの中から何枚かのカードを取り出した。

「　この中からカードを引いてもらって、そのカードに書かれていた罰ゲームをやってもらいまーす」

「……相変わらず、そういう事には無駄に準備が良いんだな……」

「あらっ 褒めても何にも出ないわよ?」

「皮肉だっ!」

「あたしの方こそ皮肉よ?」

「ぐっ……ええいつ!ルール説明が終わったのなら早く始めるぞっ!」

「あら さすがはあたしの自慢の彼氏様 のりのりね」

「……もう何も言わん」

「じゃあ、あたしの先攻ねっ!えくと、あたしの趣味はジグソーパズルである」

「ダウト。一度は夢中になったが、三日で飽きただろうが」

「くっ……さすがによく知ってるわね」

「当然だ では俺の番だな。俺の趣味は数独である」

「ホントのことね。」

えくと、確か一週間前からハマっているのよね?あたしが数独苦手だから、あたしの目の前ではやったことないけど」

「……お前の方こそよく知っているな」

「フッフッフ、当然よっ！さあ、あたしの素晴らしさを存分に理解したところで、あたしを崇め奉りなさいっ！」

「全力で断る」

「まっ！これだけ健気で可愛い彼女だっていうのに、どこが不満だっって言っのよっ！」

「別に不満はないが・・・強いて言えば、そのテンションの高さはたまに気になるな」

「ヨヨヨ・・・ああ神様、目の前に居るこの贅沢者は、いつかあたしを捨てるでしょう。あたしは一体どうすればよいのでしょうか？」

「ダウト。お前、そんなこと微塵も思っていないだろ？」

「……うーん、今回はあっさり引つかかってくれないわねえ。『そんな事するかっ!』って興奮するかと思ってたのに」

「ハッ!この俺がいつまでも同じ手に引つかかると思っなよっ!」

「ダウト」

「どういう意味だっ!それは!」

「ほーら あっさりと引つかかったじゃない」

「グッ!」

ちよつと待て……どんどん本来のゲームから逸れていっ  
ていなか?  
いか?」

「あら、ホント」

「それと思っただが、相手がホントの事言っているかが分かる  
質問じゃないと無理だろう?その辺りはどうするんだ?」

「あら、特に問題ないじゃない?だって」

ここで女は、春の日差しのような柔らかな笑顔を向けると

「あんたはあたしの事を世界で一番良く知っているでしょ

」

そう、微塵の疑いも持たずに言い切った。

「・・・まあな」

さすがに照れているのだろう。男の目線は、女から逸れ何も無い部屋の隅へと流れていった。

「ではゲーム再開ということで 応急手当に必要な4つの処置を『RICE処置』と言いますが、ここに出てくる『RICE』とは、

Rest (休息)

Ice (冷却)

Compression (圧迫)

Elevation (挙上)

の頭文字である」

「・・・おいつ！なぜいきなり問題のレベルが跳ね上がるんだっ  
！」

「あら、細かい事を気にする男はもてないわよ？」

そう無邪気に あるいは、無邪気を装って尋ねてくる女に対して、男は何かを言おうとしたが、結局何も言わないことに決めた。そして、数秒間じっと目をつむって何かを考えていたかと思うと、しぼりだすような声でこう言った。

「・・・ダウトだ。『Rice』の『C』は『Control』  
(抑圧)の『C』だ」

男がそう答えた瞬間、女は勝ち誇った笑みを浮かべた。

「残念でした」 『Rice』の意味は、さっきあたしが言った意味で合ってるわ」

「クソッ！」

「では、お待ちかねの罰ゲームタイム」 さあさあ、このカードの中から一枚を引きなさいっ！」

男は、女が嬉々とした様子で差し出してきたカードを、まるで親の敵でも見るかのような視線で射抜いていたが、しばらくすると覚悟を決め、女の手から一枚のカードを勢いよく引き抜いた。そこには

カードいっぱい大きな文字で『ちよんまげ』と書かれていた

「アツハツハ ケツサク」

「・・・いつそ殺してくれ」

そこには、大笑いする女と頭がちょんまげ（もちろんカツラ）になっっている男の姿があった。

「この姿を写真に撮って、友達に送りつけてやるうかしら？」

「ヤメロツツツ！！！」

「分かってるわよ さすがに可哀そうだし、そんなことはしないわ」

「クソツ なめるなあ！」

男はちょんまげのカツラを勢いよく脱ぎ捨てると、女に向かって  
宣戦布告した。

「ならば俺も本気でいかせてもらおう 東京タワーの大展望  
台までの昇り階段の段数は、ちょうど700段であるっ！」

男が自信満々で出したその問題は

「ダウト。東京タワーの大展望台までの登り階段の段数は、ちょうど600段だもの」

女によってあっさりと打ち破られた。

「フフンッ、まだまだ甘いわね。今の出題はあの隅に置いてある雑誌に載ってるじゃない。この部屋にほぼ毎日入り浸っているあたしだもの、そんなものは既にチェック済みよっ！」

「・・・考えてみれば、俺の部屋でやっている時点で、俺が不利すぎるんだよね・・・」

そう言った男の背中には諦めと哀愁に満ちていた。

「あら？気が付いたら残り時間が、もうあと二分しかないわね

よしっ、最後は特別ルールにして『ダウト』かどうかを宣言するのは、あんたとあたしがそれぞれクイズを出し終わった後、一斉にするってことでどう？」

「・・・好きにしる」

「じゃあいくわよ？・・・あたしはあんたが、世界で一番だっ嫌いっ！」



「奇遇だな

俺もお前が、世界で一番嫌いだよ」

しばらくの間、二人の間を沈黙が通り過ぎていく。そして何の合図もなかったにも関わらず、二人は息をそろえてこう言った。

「」  
「」  
「」  
「」  
「」

臯月　く鯉と花見とバカップル

とある公園の片隅で、一組の男女がのんびりとしていた。

「あゝいい天気ね」　今日は外に出てきて正解だったわね。ゴールデンウィーク中だから混んでるかと思っただけど、ここは意外とすいてるし　こんなナイスな提案をしたあたし自身を褒めてあげたい気分だわ」

「・・・お前に命じられて、この一週間ずっと近所の穴場スポットを探したのは俺なわけだが？」

「うむうむ、良くやった。褒めてつかわそう」

「何でお前はそんなに偉そうなんだっ！」

「あらあら、こんなにいい天気なのに不機嫌だったらもったいないわよ？」

「誰のせいだと　いや、良い。お前の戯言につきあっても、こっちが疲れるだけだ」

「ムッ！誰が面倒くさい女ですってっ！」

「誰もそんなことは言っていないだろうが！・・・一応、自覚はあつたんだな？」

「まっ！自覚って何よ、自覚って！」

いつものように犬も食わないようなやりとりが続く。ただ一点だけいつもと違つとすれば、それはここがいつものアパートではなく、公園という公共の場所であることだ。つまり・・・

「そろそろ騒ぐのは止めてくれ。いかに穴場とは言つてもそれなりに人は居るんだ。」

・・・流石に注目を集めるのは恥ずかしい」

「あら？あたし達のラブラブっぷりを見せつけてやればいいじゃない」

「・・・頼むから止めてくれ」

そんな中、一枚の花びらが女の頭の上へと降ってきた。

「あら・・・これは桜かしら？変ね、今はもう桜は散っているはずなのに」

そんな女の疑問に対して

「これは八重桜だな」

と、男は簡潔に応えた。

「八重桜？・・・あゝあの『いにしえの〜奈良の都の八重桜』ってやつ？」

「その八重桜だ。八重桜は普通の桜より開花が遅いと聞いたことがある。ちなみにお前の今言った歌の続きは『けふ九重におひぬるかな』だな」

「百人一首よね？　そうだわっ！来年の正月は百人一首大会やりましょっ」

男は『また妙なことを思いつかせてしまった』という表情をすると

「お前・・・二人で百人一首って、詠み手と取り手しかいなくなるだろうが・・・」

と呆れたような溜息とともに言葉を発した。それを聞いた女は意地の悪い笑顔を見せると、こう言い放った。

「あら〜　あたしはあなたと二人つきりで正月を迎えるなんて一言も言っていないけど〜」

「つつっ！」

「あんたが、そんなにあたしと二人つきりで正月を迎えたいって言うんなら仕方ないわね〜来年の百人一首大会はやっぱり取りやめ〜」

「・・・勝手にしろ」

「あらあら、そんなに照れなくなつて」

言葉の途中で女は何かの興味を惹かれたように急に口をつぐんで視線を上へあげた。男も女の見ている視線の先をたどり

「????何かまた変なものでも見つけたのか？」

と尋ねた。

「変なものっていうか、あれよあれ。毎年この時期にはよく見かける奴」

「ああ。」

鯉のぼりか」

「そうよ。特に、あつちに見えるのは本格的な奴で大分大きいじゃない・・・そういえば、あんたも男の子だったわよね？」

「・・・お前は俺が女にでも見えるのか？大方、俺の家では鯉のぼりを飾っていたかつて聞きたいんだらう？」

「あら 流石はあたしの自慢の彼氏様 良くあたしの言いたいことが分かつたわね」

「流石に俺だつて今の話の流れからして、先の展開が読めないほどバカじゃない・・・ちなみに俺の家では、あそこまで大きいのはさすがになくて、ベランダにつるす様な小さいのしか飾ったことはないぞ」

「へえ、やっぱり男の子のいるうちは小さくても鯉のぼりを飾るもんなのね、それじゃあ兜なんかは？」

「あるわけないだろう」

「なるほど・・・だからあなたはこんなに気弱に」

「誰が気弱だつ！俺は別にお前のお尻になんか敷かれていないつ！・・・大体それを言うなら、お前だつてその可愛げのなさは、家でひな人形を飾つてなかったからじゃないのか？」

「まつ！誰が可愛げがないですつて！あたしの可愛らしさが分からないなんて、あなたの目は節穴よつ！」

その後しばらく、二人のじゃれ合いは続いた

「ぜえぜえ、一旦休戦にしようじゃないか」

「そうね・・・さすがに疲れたわ・・・それにお腹も空いてきたし」

「そう言えば、さっき柏餅を買ってきたんだっとな」

「そうだったわね。すっかり忘れてたわ」

そう言つて男は自分のカバンの中から3個入りの柏餅のパックを取り出した。そしてまず一つを女の方へ差し出そうとしたが、その動作は女の声によつて中断させられた。

「ちよつと待つて、ただ食べるんじゃ面白くないわね・・・」

「柏餅を食べるのに、面白さを求める必要があるのか？」

そんな男の正論は女に聞き入れられなかったようで、女は自分のバッグの中に手をつっこむと

「じゃじゃ〜ん」

と言つて、バッグの中から新聞紙で作られた兜と新聞紙を丸めたもの（恐らく刀のつもり）を取り出した。

「・・・何でお前はそんなものをバッグに入れて持ち歩いているんだ？」

「え〜？だつて今日は子どもの日だから、あんたに被せて遊ぼうと思つて」

「・・・そうか」

そう答えた男の顔には全てを受け入れる悟りの表情が浮かんでいた。

「じゅあ、いつもの通りルールを確認するわよ。」

今回は極めて単純よ。まずじゃんけんをして、勝った方が  
刀で相手の頭を叩きに行く。負けた方は兜でそれを防ぐ。相手の頭  
を叩くことが出来れば、その時点で柏餅を一つ手に入れることが出  
来るわ。防がれた場合はもう一回仕切り直して、じゃんけんをやり  
直す。・・・何か質問は？」

「特にないな」

「柏餅の個数と同じ3回勝負で行くわよ。」

じゃあ始めるわ。最初はグー、じゃ〜んけ〜ん、ぽんっ！

女の手はグー

男の手はパー

女の左手は素早く兜に伸び、男の左手は素早く刀に伸びる。勝負  
の行方は・・・



『ポカッ』

男の勝利であった

「くっ、本気で来たわね・・・」

「当然だ。でないと、お前に失礼だからな」

「フッフ、そうこなくっちゃ。次は負けないわよっ！」

最初はグー、じゃんけん、ぽんっ！」

ヒートアップする二人の勝負。今度の決着はいかにして着くのか？

女の手はパー

男の手はグー

女の右手は刀へ、男の左手は兜へ伸びる。勝負の行方は？

『ポスっ』

見事に、男は兜で女の刀を防いでいた

「くやしい〜」

「まあ、実力の差だ。諦める」

そう言って男が兜を戻そうとした瞬間

『もらったっ！』

女は刀をもう一度振り下ろした。

『ポスっ』

しかし、その一撃は再び男の持つ兜に防がれていた。

「フッフッフ。甘い甘い、そんな考えはお見通しさ」

「・・・あなた、そうとう慣れてるわね」

「当然だ。小学生のころは、結構頻繁にやっていたからな。お前程度の策略では俺には勝てんよ」

「くっ！少しばかり上手くいったからって、調子にのらないことねっ！」

威勢のよい事を口では言いつつも、女は自分の不利を自覚していた。

『このままでは勝ち目は薄いわね。まともによっても勝ち目がないなら、仕掛けるのはほんの刹那』

「いくわよ。最初はグー、じゃんけん、ぽん！」

女が出したのはパー

男が出したのはグー

男の右手が兜に伸び、女の右手が刀に伸び      なかった。

「どりゃあああつつっ！」

女はパーのまま右手を左へ振りぬくと、男が取ろうとしていた兜を弾き飛ばした。

「なっ！」

あまりの出来事に男は短い間呆けていた。しかしその間に

『ポカッ!』

女の刀が男の頭を叩いていた。

「ふっふっん こんなものかしら〜!」

「くっ!次は負けんぞ!!!」

これで一勝一敗勝負は最終戦へともつれ込んだ。

「いくわよっ!最後の一回、最初はグー、じゃんけん、ぽんっ!  
!」

女の手はグー

男の手はチョキ

男は一瞬の間に思考を巡らせる。

『グー・・・やはり、さっきの手は効かないと考えて思考を切り替えてきたか。恐らく、次にあいつが考えるのは俺が対策を考える

間に攻撃してしまう、という即効勝負だろう・・・しかし、まとも  
にやれば俺の方が早いのは一戦目で証明済みだ。ここから全力で兜  
を取れば、あいつの攻撃は防げるはず。』

そう考え、全力で右手を兜に伸ばした。しかし

「チエスツーッ……!」

女は握りこんだ拳のまま、その右手を

男の脇腹へと突き刺した。

「グホッ！」

男が痛み悶える中、女は

『ポカッ』

と男の頭を叩くと

「あたしの勝ちねっ！」

と声高らかに宣言した。

「ヒドイ目に遭った……」

「何よ、勝負の最中に油断する方が悪いんじゃない」

「お前・・・それは小学生レベルの言い訳だぞ・・・」

「もう、だからちゃんと謝ったじゃない・・・それとも、“これを止めてもいいのかしら?”」

「・・・」

そう、今は男が女の膝の上に頭をのせているいる状態、いわゆる『膝枕』の体勢なのである。

「・・・しかしゴールデンウィークも、もうお終いか」

「全然さりげなくないけど、話題転換に乗ってあげましょう。まあ、確かに過ぎてみるとあつという間だったわね」

「・・・お前は良かったのか？」

「何のこと？」

「結局このゴールデンウィーク中はこの公園に来ただけで、後はいつも通り俺の部屋にいただけだったじゃないか。この連休前から『あそこも行きたい、ここも行きたい』って言ってたお前はそれで良いのかと思つてな」

「何だ、そんな事を気にしてたわけ？」

「・・・まあな」

「下らない悩みね、別に良いのよ。だって



あたしはあんたと一緒に居られれば、どこだっていいんだ  
から」

「・・・そうか」

「あゝ！赤くなっちゃって、かゝわいい」

「ええいつ、人をからかうなっ！」

「きゃゝ、コワイ」

この連休中、あなたは大切な人達と一緒に過ごすことが出来ましたか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2538/>

---

Memories ~バカップルどもの春夏秋冬~

2010年10月10日16時08分発行